

ついにピカソの名作に対面！

アンダルシア地方のセビリアから空路でマドリードまで戻りました。そしてマドリードの美術館で、ついにMは憧れのピカソの名作「ゲルニカ」に対面したのです。まず驚いたのは、ゲルニカの大きさとその迫力。「モナリザ」と並んで、学校の教科書ではお馴染みの絵ですが、こんなにも巨大だとは思いも寄りませんでした。教科書の写真で見るかぎりでは、「モナリザ」も「ゲルニカ」も同じような大きさなのに、実際見てみると「ゲルニカ」の方は、「モナリザ」の何十倍もあります。「やっぱ、絵はナマで見るもんだなあ～」MとOKUは、心から感嘆したのでした。

(おしまい)



橋本コラム トールのトーク

今年も流行語大賞の季節になった。たしか去年は「インスタ映え」と「忖度」だった。誰が選ぶか知らないが、日頃気にもしない自分たちの忘れっぽさに気付かせてくれる。ちなみに「集団的自衛権」は2014年のノミネートである。あの頃ぼくは報道を覗ながら、数度押し切る与党のやり方に腹を立てていたものだ。首相のお友達の森友学園に国有地を払い下げて利益供与をしたことに端を発したモリカケ問題。財務省ほかの公文書改ざんで刑事告訴までされたにもかかわらず、政府官邸はだれも責任を取らず、世の中が忘れるのを待った。そして、「首相案件」で思惑通りになった。

嘘もつき通したら許されるのか？ そんな馬鹿な。忘れるの早いなあ。

さて、私ことながら、今年は『そだねー』を選びたい。

普段全くスポーツを見ないぼくが、夜更かし早起きしてカーリングを見ていたのを思い出す。思い出すとはいえば今年2月のことだけれど。

書きながら人間の時間感覚も案外ファジーなものだとつくづく感じた次第である。

『そだねー』！せっかくルールを覚えたのにカーリングゲーム中継がないのは寂しいにや。

静岡障害者自立生活センター：橋本徹

“どんなに重い障害があっても
地域で共に生きる社会”を目指して！

NEWS



2018
12月号

発行 静岡障害者自立生活センター
(NPO 法人ひまわり事業団)

〒422-8006 静岡市駿河区曲金5-4-58
TEL:054-270-6380
FAX:054-287-4922
E-mail:syoujiki@scil.jp
ホームページ:<http://www.scil.jp>



今年も賑やかに開催！ ひまフェス(ひまわりフェスティバル)

今月の目次

| | |
|-------------------------------|----|
| 報告：今年もやりました！「ひまフェス vol.2」 | 2 |
| 連載：ソーター×ソーター 森川三津夫×斎藤裕士 | 4 |
| 連載：ひまわりヒストリア 1989年ホットハート静岡の設立 | 6 |
| グループホームなな～らの紹介 | 8 |
| 報告：障害者虐待防止ワークショップ in 沖縄 | 12 |
| 連載：旅マイスターOKUのインディー旅のすすめ その3 | 14 |
| 橋本コラム「トールのトーク」その他 | 16 |



ひまフェス vol.2

日時：平成 30 年 10 月 20 日（土） 10:00～15:00

場所：ひまわり事業団 事務所



ひまわり事業団が曲金の新社屋に移転して早いもので 2 年となります。

今年も、昨年に引き続き「ひまフェス」を開催しました。

当日はお天氣にも恵まれ、150 人程の方々が来場されました。

今回は「ひまフェス VOL.2」と称して、日頃の活動の発表と地域の皆様との交流の場として、子どもたちが楽しめる催しものを企画しました。

会場ではヨーヨー釣り、ストラックアウトなどのゲームコーナーなどが設けられ、利用者さんが積極的に接客にあたる姿が見受けられました。

また、第 1 回より恒例？となりつつあるお化け屋敷「13 日の金曜日呪われたキャンプ場」や「魔女カフェ」なども盛況で、特にお化け屋敷は前回に比べかなりのクオリティの高さには驚きました。

ステージコーナーでは生活介護の利用者さんによる様々な楽器の演奏などが行われ、特に合唱「それいゆの歌」の発表では、みんなの頑張りと練習の成果が見られました。

その他、利用者、保護者、ヘルパー、職員の有志によるフラダンスなど、会場全体を大いに盛り上げました。

これからもひまわり事業団は、理念である「どんなに重い障害があっても地域で共に生きる社会をめざして」をモットーに、自立生活センターとしての活動をはじめ地域の皆様との交流を深めていきたいと考えております。



開会宣言



☆生活介護音楽発表 がんばりました☆



☆らるくのみんなも
お手伝い♡



☆それいゆのみんな笑顔☆



☆フラダンスも盛り上りました♪



13 日の金曜日
呪われたキャンプ場

サポーター×サポーター

森川三津夫×斎藤裕士

互いに支え合う、「利用者とヘルパーの関係」に焦点を当てる本企画。

第3回の今回は、ひまわり事業団、最古参の利用者、森川三津夫さんと、
その盟友である斎藤裕士ヘルパーに、お話を伺いました。



森川三津夫 昭和26年8月4日生まれ(67才)

ひまわり事業団の創設時のメンバーの一人。あの伝説のひまわり寮の元住人。
ひまわり共同販売所から係わりを持っている方でもあり、ひまわり事業団の名
付け親でもあります。
元、ひまわり事業団事務局長。元、青い芝の会、静岡副代表。
趣味、高校野球、プロ野球観戦、大の巨人ファン。
ひまわり事業団のコアな歴史を知りたい人は森川さんまで！

斎藤裕士 昭和39年5月27日生まれ

調理師、ふぐ調理師、介護福祉士、ヘルパー歴27年のベテラン。
ひだまりの料理の鉄人。元板前の斎藤さんの作るカレーは絶品です！様々なカレー屋を食べ歩きして味を追求して作ったカレーとのことです。
むらまんさんにカレーの作り方を教えたのも斎藤さんです。
カレーを食べたい人は斎藤さんまで！



■森川さんがひまわり事業団の名付け親と聞きましたが本当ですか？

森川 なべさんとかっちゃんと野崎さんと事務所の名前を考えていた、「お前が考えてこい！」と言われて困っていたんですね。その後、家にあった便箋の下の方に花言葉が書いてあって、いいの無いかなと見たら、『ひまわり』で、意味が『光輝、ひかり輝く』とあったんで、これだ！で決めました。当時はこの事業所が、まさかこんなに大きな事業所になるとは思っていませんでした。

■森川さんと斎藤さんの出会いはいつからですか？

斎藤 1991年頃、当時、調理の仕事をしていたが、通勤中交通事故に合い仕事を辞めて、駐車場（現それいゆ駐車場）でアルバイトをしていた。そこで職員だった森川さんから「僕のヘルパーやらない？」と声をかけられたのがきっかけ。なので、かれこれ27年の付き合いになる。

■ここまで長く続いているきっかけはあるんですか？

斎藤 2001年頃、森川さんがギランバレー症候群を発症して、その時「もう死くなってしまう」という話だった。死くなるまで係わるつもりだったが、結局回復し、今まで付き合うことになった。

森川 ほんとにこの時は死ぬ直前までいたと思う。夢の中で菜の花畑も見ていて、人に声を掛けられて振り向いたら病院のベッドの上だった。

■ギランバレー症候群とはどのような病気ですか？

森川 ギランバレーという病気はめずらしい病気で、発症した時、済生会病院に運ばれたが何の病気かわかる医師が誰もいなかった。数日後わかることとなった。ギランバレーは免疫が、病原菌ではなく神経を攻撃してしまう病気。症状は身体の力が全く入らなくなってしまうものだったので、脳性麻痺とは真逆の病気ですね。発症率10万分の1の確率。また、脳性マヒでギランバレーになる確率



は100万分の1の確率。なんでこんな病気になって、宝くじが当たらないんだ！と思ったね(笑)ちなみにフランスの神経外科医、ギランさんとバレーさんが発見したので、ギランバレーと言う名前だそうです。

■この病気になったのが、自立生活をするきっかけにもなったと聞きましたが？

森川 この病気で24時間介助が必要になって、当時は谷津（注：静岡市の山間部）に住んでいたんですね。そこでは行けるヘルパーも少ないとということで、小鹿で自立生活することになった。最初は大変で、時間数も少ないので、当時はボランティアで、事務所職員やお坊さんにまでヘルパーに入らせてもらいました。

僕の場合は、自立生活したくて始めたのではなく、自立生活せざるを得なかった、で始まっています。結果、今ではあの時、自立生活して良かったと思いますが。

斎藤 自分も当初から週6回9時～21時でヘルパーに入っている。今は労働時間数の関係もあり、入る時間は減っているが、週6回は入っています。

■それだけ長い時間を、同じ人と一緒に過ごして、大変になりませんか？

斎藤 時にはケンカもあるが、今ではこれが普通になっているので大変ということはない。家族みたいな感じになっている。

森川 自立生活をしていく上で必要な事なので大変とは言つていられない。

■理想とするヘルパーと利用者の関係について、どう思いますか？

森川 友達のような関係。ただ仕事だという事を忘れないことも大事。どちらかに片寄ってしまうと良くない。このバランスが大事だが、それが難しくも感じる。

斎藤 指示がないから何も動かないのではなく、必要なことはヘルパーが情報提供し、動くことも大切だと感じる。

■最後に、森川さんの後輩達が自立生活を始めようとしていますが、何かアドバイスはありますか？

森川 最初は大変かもしれないけど、生活が軌道に乗ってしまえば楽になりますよ。自立生活をして良かったと思うのは、色々な人に出会えたことです。

是非この経験を後輩達にもしてほしいね。あと、とにかく言えることは、がんばれ！

ひまわりヒストリア～あの日あの頃～

その4 1989年 ホットハート静岡の設立

文責：奥村譲

「介護はボランティア」があたり前だった時代

やや大げさな表現になるが、人類の長い歴史の中で、介護という行為が「労働」として認識されるようになったのは、ほんのここ2~30年のこと過ぎない。

それまで介護は、大部分が家族関係の中で、主に母親の役割として行われてきた。

1970年代に障害者の自立生活運動が高まり、一部の先鋭的な障害者たちが施設や親元から飛び出し地域に出てきたが、当時は介護を保障する制度は皆無に近かったため、彼らの介護の担い手は主にボランティアであった。

当団体の「原点」とも言える、ひまわり寮（静岡市駿河区にあった障害者の共同生活寮）を思い返しても、いわゆる左翼と言われる活動家や労働運動家、宗教家（と、ひとことで言ってもクリスチヤンから仏教系や新興宗教までさまざま）やフツーの主婦から学生まで、有象無象の人物たちが毎日入れ替わり立ち代わり出入りして、寮で共同生活する障害者たちの介護を担っていた。

ある者は、調理や掃除・洗濯といった家事。ある者は、入浴、排せつ、夜間の寝返り。

もちろんすべて無償であり、これらの行為にお金が支払われる時代が来るとは、当時は思いも寄らなかった。



初めて介護にお金が支払われた！

当時学生であった私も、週に一回程度ひまわり寮に入りながら、男性障害者たちの入浴介助や夜間の泊り介助に関わっていた。

いわゆる「仕事」ではなかったので、彼らと共にお酒も飲んだし、一緒にマージャンもやった。

時には「急にバイトが入ったので、行けなくなった。ゴメン！」と、介護をドタキャンすることもあった。

1989年、ひまわり寮の一室に、有料介助システム「ホットハート静岡」が発足した。

これまでボランティアという無償だった行為に、些少ではあるが初めてお金が支払われることになった。この時の戸惑いを、私は今でも覚えている。

「お金をもらったら、酒も飲めないし、マージャンなんて出来ない…」

「これまで“はだかの付き合い”をしてきたのに、お金を払うなんてそんな水臭いことはやめてくれ…」

しかし、今にして思えば、どんなに「友だちのような対等な関係」と思っていても、私の側からは「今日は急なバイトが入ったので行けなくなった」とたった一言で介護をキャンセルできるのに対して、彼らの側にはそのように言える権利は一切ない。

これではとても対等な関係とは言えないではないか。

当時ホットハート静岡を立ち上げたメンバーたちの思いは、まったく別のところにあった。

彼らは、「善意や恩恵として上から与えられる介護」ではなく、「当然の権利として要求できる介護」を求めていたのだ。

私自身の例を見てもわかるとおり、ボランティアほど當てにならないものはない。

當てにならないボランティアに、命にも関わる自らの介護をゆだねるわけにはいかない。

そのためには「有償性」というものが不可欠であったのだろう。

ホットハートの仕組み

「有償」とはいっても、マトモな賃金、すなわち最低賃金を上回る報酬が支払われたわけではない。

今のような制度的な裏付けがあるわけではないので、利用者は介助料の100%を自らの財布から支払わなければならなかったからだ。

介助者は、あくまでも「有償ボランティア」。つまり「ボランティア以上、労働者未満」という微妙な立ち位置であった。

当時の資料を見返して見ると、以下のような仕組みであったことがわかる。

- 利用者も介助スタッフも「会員」という同じ立場で年会費を支払って入会する
- 介助を受ける側は1時間500円+交通費を支払う
- 介助する側は1時間400円+交通費の報酬を受け取る
- 事務局は上記の差額100円を事務費として受け取る

介助スタッフは、何かの資格が必要なわけではなかったし（そもそも当時はまだヘルパーの資格化はされていなかった）、介護の内容も特に制限がなかった。

また、特筆すべきことは、介助スタッフは、報酬を受け取る代わりに、それを「将来自分が介助を受ける側になる時」に備えて、預託する仕組みがあったことだ。

ホットハート静岡は、地域における「相互扶助」の精神を大切にしたのである。



介護者＝「労働者」に

2000年の介護保険制度導入、続いて2003年の支援費制度開始に伴って、気がついてみたら、介護者は「ボランティア」から「労働者」になっていた。

介護者は、事業所に所属して、事業所からマトモな給料（つまり最低賃金以上の）をもらい、社会保険に加入するなど労働者としての諸権利も保障されるようになった。

障害者の生活、介護者の生活、ともに安定するようになった代わりに、何か大切なものが失われたような一抹の寂しさを感じた。



グループホーム なな～らは

NPO法人ひまわり事業団が運営する、知的、精神、身体障害の当事者である複数の利用者の皆さん、「世話人等」の支援を受けながら、地域のアパートで共同生活するグループホームです。

なな～らの目的

障害があっても地域で当たり前に生活できる社会(ノーマライゼーション)を目指す事業団の応援の下、なな～ら入居者の皆さん、地域で安心して楽しく暮らすことを目的としています。

なな～らの方針

- C I L (障害者自立生活センター)の理念

ひまわり事業団活動綱領
どんなに重い障害があっても地域で共に生きる社会を目指して・・・

をもとに、障害者自身が管理・運営します。

- 家庭的な雰囲気を大切にしつつ、一人ひとりの自立を促す支援を大事にしています。
- 入居者の皆さんの思いを尊重し、自分らしく暮らすことを何より大切にしています。



この回はカララオケで祝いました。



年数回、みんなで楽しい外出もします♪
写真は後にたっぷり掲載しました (^ ^)



なな～らでの楽しい夕食♥



なな～らで暮らす皆さんの紹介

佐野匡さん 60代 ひまわり事業団の就労B型事業所「それいゆ」に通う。

お仕事大好き・コーヒーショップやお買い物、可愛いもの（今は猫グッズ）が大好き。優しくてお部屋もファンシー♪

大石将さん 40代 就労B型事業所でパンを販売したり裏方を担う。

海外旅行・ダンス・カラオケ大好き。教会に通ったり、はぴねすに参加したり休日を楽しく過ごす。

荒井和代さん 60代 静岡盲学校を卒業。

個人でマッサージの仕事を10年、27年過ごした静岡ライトホームでもマッサージをしてきた。ヘルパーとの外出やスイーツが好き。

倉野多恵さん 40代 長年通った就労B型から清水の就労B型に移り通つて3年。

穏やかで仲間に優しく、夕食のお手伝いも上手にしてくれる。温泉が好き。

竹下友斗さん 20代 ひまわり事業団の就労B型「それいゆ」に通う。

職場では頼りになる有望な働き手。今は自分の思いをお話しえ、特撮ヒーロー玩具等やタレント等のポスターを飾った部屋で大好きなCDを聞くのが趣味。みんなで出かけるカラオケでも歌を披露してくれる。

高野裕至さん 30代 就労B型事業所通所。数年間の体験宿泊を経て昨年10月から入居の新人さん。

絵画教室、音楽教室、ボーリングやスイミングなどのスポーツ教室などに通う多趣味な青年。

小林瑛美さん 30代 平日の午前中は幼稚園でお掃除の仕事に就き、午後は地域活動支援センターに通う働き者。

明るく優しい女性。休日は教会含め、多趣味な活動に関わり、まだ浅いな～らでの暮らしでも仲間と仲良く過ごしたり、夕食準備なども一所懸命してくれる。

KSさん 40代 幾つかの職場で掃除や配膳などをこなし、その後就労B型や他のグループホームを経てなな～ら入居。しっかり者の「お姉さん」。ジャニーズ、ディズニーワン大好き。お洒落も大好き。今通っている就労B型では頼りにされているしっかり者。

永井敦子さん 40代 日中は生活介護に通う。

お話し大好き。週1回お父さまとのお出かけや実家での過ごしを楽しんでいる。韓流大好き♪自室でCDなどを聞いてゆっくり過ごすことが好き。

横山卓児さん 40代 (G Hなな～らを卒業して同アパート内で一人暮らしをしている)

愛鷹職業訓練校卒、段ボール制作会社に入社、今まで勤続している働き者。休日は自分で計画を立て自転車でどこにでも出かけ、時には富士や三島にも行く。昨年より同じアパートの3階で一人暮らし開始。なな～らからの自立第一号♪

世話人からのメッセージ

清水 かおり

明るさが取り柄です。みなさんがなな～らで笑顔で楽しく過ごし、バランスが良く美味しい料理を提供できるよう心がけています。

見城 剛弘

利用者のみなさん、入居したばかりの頃は身の回りの事を自分でするには難しい事もありましたが、今ではかなり自分で出来る事が増えてきている事をとても嬉しく思っています。これからも皆さんご自身で力を付けられるように応援したいと思います。

写真で見るなな～ら生活風景

みんなでまかいの牧場に。バーベキューも楽しみましたよ♥



山梨に行ってさくらんぼ狩りも楽しみました♪



富士サファリパークはXmas一色でしたよ (^o^)



地震防災センター体験や

地域防災訓練にも参加しています。



簡易トイレ体験も

第9回

かつこの部屋



作…千田桜子様
就労継続支援B型
それいゆ利用者様

おしゃべりしてくれる方、遊びに来て下さ~い仕事の事、遊びの事、世間話、等なんでもOK利用者さん、ヘルパーさん(男女問わず)となたでも
ドアが開いている時はひとついちでいます。
となたかおしゃべりに来て下さ~い

・日時:1月28日(月)10:00~15:00

・場所:ひまわり事業団2階・相談室

ぜひぜひ顔をみにきてください~~~



毎月やってま~す!

☆2月26日(火)

13:00-16:00

☆3月29日(金)

13:00-16:00

(プロフィール) 氏名:望月賀津子

・ホットハート(ひまわり事業団の前)に平成7年に登録し、23年が経ちました。

※現在はチーフヘルパーとして活躍中

たくさんの方との出会いがあり、私の財産となっています。(お金には替えられないですね。)

趣味:エスパルスの応援、コンサート鑑賞(特に永ちゃんは大~~好き)、ママさんコース、食べ歩き。等々遊ぶ事のみ!

連絡先...090-4850-3433

障害者虐待防止ワークショップ in 沖縄

去る1月9日（金）、沖縄の北部自立生活センター希輝々が企画・開催した障害者虐待防止ワークショップに、インストラクターとして招かれ、岩本肇氏（自立生活センターアシストMIL）とともに進みました。JIL人権委員会の中でも、日々の啓蒙・啓発活動の活性化や、全国の各ブロックでのワークショップ開催を目標に掲げていましたが、6月のJIL総会時に希輝々の代表・新垣氏より話があり、今回のワークショップとなりました。

今回、私にとっては2年ぶりの沖縄。前回の時（これも希輝々主催のピアカンでした＾＾；）は、名護に着いてから体調を崩し寝込み、しかも入院までしてしまい、名護までわざわざ入院にきたのか（笑）というようなことになってしまったため、今回は体調管理には気を使い、事前にかかりつけ医にかかり、処置もしてもらうという万全の態勢で臨みました。その甲斐もあって、体調を崩すこともなくインストラクターを務めることができ、一安心＾＾；

ワークショップ本番では、沖縄の各CIL（イルカ、希輝々、インクルーシブ、まんた、南十字星）から40名あまりの参加者があり、また、若手の当事者の参加が多く、とても良い内容になりました。

ワークショップの中で事例を基にしたロールプレイにも、積極的に参加し活発な意見交換があり、沖縄の若手当事者たちの勢いを感じることができました。そして、その背景には、若い当事者たちの発言を後押しする先輩の当事者やサポートする健常者スタッフ、介助者の姿、受け止める姿勢があり、障害者が声を出すための環境づくりの大切さを実感することができました。受講した障害者のエンパワメントを促す講座で、逆にインストラクターで参加した私の方が力をもらえるような時間となり、充実した三日間となりました。

（大川速巳）



差別事例をもとに考える ワークショップ

「差別解消法」ができて、来年4月で3年目をむかえます。「静岡県障害を理由とする差別の解消を推進する条例」が4月で2年。法律、条例は制定されましたが、障がいを持つ人の暮らしはいかがでしょうか？大切な事は障がいを持つ人も持たない人も共に生きていく普段の社会づくりだと思います。それに差別とは何かと言う事を共通の理解していく事が必要です。今回、差別等の事例を通して考えていくワークショップを企画しました。ぜひ多くの方のご参加をお待ちしています。

日時 平成31年1月19日（土）13時30分～17時
場所 清水テルサ7階 大会議室（東部勤労者福祉センター）

参加費無料

主催 静岡県CIL連絡協議会
共催 静岡県差別禁止条例づくりの会
協賛 特定非営利活動法人DPI日本会議

問合せ：静岡県CIL連絡協議会（事務局静岡自立生活センター担当大川）
TEL：054-270-6380 FAX：054-287-4922 e-mail：syoujiki@scil.jp
※この企画は、静岡県合理的配慮理解促進事業でおこないます。

公益財団法人キリン福祉財団助成事業

ソーシャルインクルージョンの視点に基づく障害者文化芸術

日時：2019年1月20日（日）
13時～（受付開始 12時30分） 参加費：500円

場所：清水テルサ6階研修室
主催：特定非営利活動法人 DPI 日本会議
お申込み：NPO 法人自立生活センターアシストミル
(担当：岩本)
TEL/FAX 055-976-3432

お申込みについてのご連絡先トークセッションでは同時手話通訳を行います。情報保障の必要がある方は1月11日（金）までにWeb・電話・FAXなどで事前にお知らせください。

①映画上映「もうろうをいきる」（1時間31分）

②トークセッション

大河内 直之 氏 NPO 法人バリアフリー映画研究会 理事長

齊藤 正比己 氏 静岡盲ろう者友の会 会長

小出 隆司 氏 NPO 法人オールしおおかベストコミュニティ 理事長



旅マイスターOKU のインディー旅のすすめ

～その3 画家M(脳性マヒ)とのスペイン旅行～

「施設生活ニツアーツ」であるとしたら、「自立生活ニインディー旅」です。

自立生活を目指すアナタは、もちろん旅もインディーで行きましょう！

…と、いうわけで、旅マイスターOKUがこれまで、障害を持つ仲間たちと経験したインディー旅をご紹介する企画の第二弾は、「画家M(脳性マヒ)とのスペイン旅行」です。

この旅を、例のごとくツアーツ旅行風に表現すると、

ラ・マンチャの乾いた大地をレンタカーで駆け抜け、アンダルシアの白い町と青い地中海を堪能。本場のフラメンコとピカソの名作「ゲルニカ」にふれるエキゾチックスペイン8日間！

○○万円



さてさて、どんな旅だったでしょう？

コトのはじまり

旅マイスターであると同時に、実は画家でもあるOKUは、ある日、同じ画家仲間であるM(脳性マヒ)の母親から、次のような依頼を受けました。

「ウチの息子は、ずっとピカソに憧れて絵を描き続けてきた。一生に一度いいから、息子にホンモノのピカソの絵を見せてやりたい…」

つまり、Mをスペイン旅行に連れて行き、ホンモノのピカソの絵を見せてやってほしい…という依頼です。

スペインで“モノホンのピカソ”と言えば、あの誰もが知っている名作「ゲルニカ」を見るっきやないでしょ！

Mは若い頃からずっとピカソのような芸術家になることを目指して、画家の先生について学んでいました。それにMの家は静岡でも有名なスペイン料理店を経営しており、何かとスペインとは縁が深い家柄です。

ここは、老いたるMの母親の切なる願いを聞き入れるのが、男気（おとこぎ）というものでしょう。

「わかった！引受けましょう！」

OKUはカッコ良く二つ返事で快諾しました。

…でも、正直言えば、義侠心というより、「ヒコーキ代からホテル代まですべて出すから連れて行ってほしい」という言葉にクラリとなったのでした。

悪評高きヒコーキ会社？

OKUたちが使ったのは、その頃「安い、ボロい、サービス悪い」と旅行者の間では悪評高かったエアロフトロシア航空（今はすいぶん改善されました。念のため）。

Mの甥も含めた3人は、日本を旅立った後、マドリード行に乗り換えるため、モスクワの空港に降り立ちました。

さて、ここで乗り換えがひと苦労でした。

当時のモスクワ空港は、エレベーターが無く、どこもバリアフル。

車椅子に乗ったMを、まるでロシアの農夫のようないかつい空港職員が数人がかりで担いで、長い階段をいくつも登ったり下りたり。

マドリード行のヒコーキに乗り込む際も、Mは車椅子ごと、荷物を持ち上げる巨大なフォークリフトのような車で高く持ち上げられたのです（怖かった！）。



ラ・マンチャの風車とアンダルシアの白い町

OKUたちは、首都マドリードは最後の楽しみにとっておき、空港でレンタカーを借りて、まず、ドン・キホーテ（日本中アチコチにある、あの激安店ではないですよ。念のため）で有名な、ラ・マンチャ地方へと向かいました。

ラ・マンチャは、茶色く乾いた大地の上に、ドン・キホーテが突進したという白い風車がいくつも立ち並び、「いかにもスペインへ来た！」という風景でした。

ところで、OKUはこれまで何度もヨーロッパでレンタカーを運転していますが、イギリスやドイツといったゲルマン系の国と違い、スペインやイタリアといったラテン系の国では、特に運転に気を使います。

ラテン系の人たちは、「歌って恋して、美味しいもの食べて…」すなわち人生樂しけりや、それでいい！という人種なので、運転の方もノリノリ。

ドイツなどの、勤勉で実直なハンドルさばきとは、かなり違うのです。

おまけに、こちらでは、左ハンドルに右手でクラッチ操作（欧洲ではオートマ車レンタカーはほとんどありません）。ワイパーとウィンカーの操作も逆です。

こうした基本操作に慣れるだけでも精一杯なのに、まわりをラテン人のノリノリ運転に囲まれた時にやあ、もう冷や汗ダラダラものです。

それでも何とか事故ることなく、OKUたちは、イベリア半島を南下して、あの紺碧に輝く地中海、コスタ・デル・ソル（太陽海岸）に辿り着きました。

ここには、M憧れの、あのピカソが生まれた街マラガがあります。

ピカソの絵にも影響を与えたであろう青い海を眺めながら、今度は一路西へ。

OKUとMは、グラナダでアルハンブラ宮殿を見て、コルドバでは本場のフラメンコを堪能。その後、白い家々が立ち並ぶ美しいアンダルシア地方へと至りました。

パラドールに泊まる

アンダルシアの白い町のひとつ、ロンダでは、パラドール（貴族の邸宅などを改築した高級ホテル）に泊りました。

それまでは、ベッドに蚤やシラミがわいているような安宿しか経験のないOKUにとって、パラドールに泊まることが夢のまた夢。一生ありえない！と思っていたのに…

OKUたちは、一夜かぎりの貴族になった気分で、パラドールのレストランで、アンダルシア名物のオックスステール（牛の尾）に舌鼓を打ったのです。

